

ごあいさつ

四季折々の自然環境と豊かな風土に育まれた日本では、檜や杉、松などの針葉樹、樺や檜、桑といった広葉樹といった多種の優れた木材を産し、長い歴史と文化のなかで特有の木工芸が発展してきました。それは、応用美術やデコラティブ・アートといった単一の概念に留まらない、文化と固有の審美、生活が融合したものであり、自然への精神性と個人が表現する感性の豊かさを表してきました。特に近代には、素材の特質と美しさを見極め、さらに適切な用材と合理的で繊細あるいは剛健な高度の技法を開発して、伝統と表現の世界を獲得した工芸作家が多く現れました。木内喜八・半古父子のような指物と木画・木象嵌のわざで天平風の華麗な装飾意匠を表す作家らに対して、前田桑明や稲木東千里らは、木の特質と美質で傑出した黄金色に輝く島桑をはじめとする優良材を見極め、神業的な指物と彫物等の技法による個性的な創意を発揮しました。

前田桑明のもっとも有能な後継として工房を支えた初代須田桑月は、師の伝統を発展させ、重厚で堅実な技量と雅趣のある作調をよく継承しました。その子の二代桑月（桑翠）は、新たに優れた伝統工芸の保存と普及、発展を企図して発足した日本伝統工芸展の草創期を主導し活躍しました。江戸指物の粋さと堅実さを継承しつつ寄木の意匠を巧妙にして、垢抜けしたような軽みを気品よく表した父の遺風を継承した須田賢司は、21歳の若さで日本伝統工芸展初入選を果たして以降、30数年のキャリアを積み上げ受賞も重ね、現代の伝統工芸を担う工芸作家として将来への期待がいよいよ高まっています。

須田は、日本伝統工芸展で主唱されてきた、機能・実用に即した伝統の様式美とともに、不易（＝永遠性）流行（＝新風）という風雅の観念を明らかにしています。江戸指物を基調とする木工芸の系譜を正統に継承しており、何よりも伝統の手わざや見えないところにまで細やかな工夫をこらし、手わざの冴えに洗練された粋を、主題と作調に清新な風流をうかがわせることに見栄を張って個性的であり、都会的な現代人の感性のなかに気品の香気を醸し出しています。

諸山正則 MOROYAMA Masanori

東京国立近代美術館主任研究員

Curator of Craft Gallery

The National Museum of Modern Art, Tokyo